

「音」から喚起される地域の物語

林田真心子（福岡女学院大学人文学部）

1. はじめに

わたしたちの日常は、いうまでもなくさまざまな音に囲まれている。そして音はときに、地域の文化を紡ぎ、表し、伝えている。例えば、ふとしたときにきこえるなにげない自然や街の音に、地域の記憶が呼び起こされることがないだろうか。ただし、そうした日常に突然紛れ込んだきき覚えのある音に記憶が喚起されることはあっても、日々の時間の流れの中で、音と地域の結びつきを深く意識することはそう多くはないだろう。「サウンドスケープ (Soundscape)」（「音の風景」「音の環境」と訳される）の概念を明確化したレイモンド・マリー・シェーファー (Raymond Murray Schafer) は、聴くという行為がひとつの習慣になってしまい、わたしたちは聴き方を忘れてしまっているようだ指摘している (シェーファー 1992=2009)。彼のいう「サウンドスケープ」とは、「個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境」であり、「その個人がそうした環境とどのような関係を取り結んでいるかによって規定される」 (Turax 1978:126, 訳は鳥越 1997:60)。シェーファーによると、音の風景の変容の中で、わたしたちが「聴き方」を学び、音の環境に際して意識的なデザイン決定をし始めることが大切だという (シェーファー 1992=2009)。

そこで私たちは、地域の音の風景を改めて意識し、同時に音を通して地域を再発見するためのワークショップを行った。地域と音をテーマにしたストーリーテリング実践である。

2. 実践の概要

2.1. ワークショップの流れ

本実践の特徴のひとつは、立命館大学北野圭介・北村順生ゼミ、広島経済大学土屋祐子ゼミ、福岡女学院大学林田真心子ゼミの交流実践（主に3年生）として、京都、広島、福岡の3つの地域をむすんで行ったことである。普段慣れ親しんだ自分たちの地域を異化することはそう簡単ではない。そこで異なる地域の視点を交換することによって、自らの地域に対して俯瞰的な視座を持つことを目指したものである。

交流実践は2016年と2017年の2度にわたり行った。テーマはそれぞれ異なるが、実践の進め方は、両年とも図1のとおりである。1)「音」の収集と共有、2)「音」と地域をめぐるストーリー制作、3) 合同発表会の3つの段階を踏んだ。

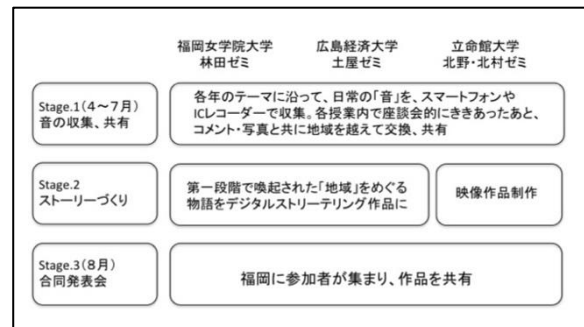


図1 実践の流れ

2.2. 実践のテーマ

2016年は「なつかしさ」をテーマに、音の収集、作品づくりを行った。「音は時代と人々の生活史を物語る」と山岸美穂がいうように (山岸 1999:59)、私たちのまわりには、時の移ろいや日々の何気ない営みを伝える音がたくさんある。なつかしさという感覚を媒介とすることで、そうした生活にしみついた地域の音に参加者がより着目することを目

指したものである。一方 2017 年は、前年に比べてより場所性を意識して、テーマを「街と自然」とした。

3. 学生の作品と気づき

ここからは、福岡における実践の様子を中心に報告していく。2016 年の実践については林田（2017）を抜粋、加筆して紹介する。

3.1. なつかしい「音」（2016 年実践）

2016 年の実践において、第一段階で学生が収集した日常にあるなつかしい「音」は、多くが幼少期や学校での思い出など、それぞれの個人的な記憶にまつわるものがほとんどであった。しかし、参加者は同世代であることもあり、「音」を共有した際には自然と互いの記憶が刺激され、その場は共通のなつかしい話で大いにもりあがった。その中でも、自然音（川のせせらぎ、カエルの鳴き声、雨音など）、テクノロジーの変容に関するもの（キッズケータイの開閉音、インスタントカメラのネジをまく音など）は多くの共感をよんでいたようだった。学生のひとは、実践のコメントシートに「自然から生まれる音は、誰が聞いてもなつかしさを感じる共通の感覚ではないかと思った」と記している。一方で、「私にとっては馴染みはなく、実際にきいていたことがある訳がない音でも、なぜかなつかしいとおもってしまうものが多くあった」（学生のコメント）という。例えば、豆腐屋さんのラップの音や、踏切音がそれであった。ある学生はそうした音の感覚を、「なつかしい」という固定概念があるもの」と分析している。こうした学生の指摘は、フレッド・デーヴィス (Fred Davis) のいう「集合的ノスタルジア」の存在に気づかされるものであった (デーヴィス 1979=1990)。このように参加者がそれぞれの「サウンドスケープ」を意識したり、私たちの「なつかしい」感覚がどのように醸成されているのかを考えたりする過程が、ところどころでみうけられた。

3.2. 「なつかしい音」が喚起する物語 (2016 年実践)

第二段階では、こうした自分たちの地域、あるいは異なる地域のなつかしい「音」から喚起された自らのなつかしい物語を、写真と自己語りで表現するデジタル・ストーリーテリング作品にまとめた。特に 2016 年は、他者の記憶や経験を通して呼び起こされる自らの物語を綴る、リレー型のストーリーテリング実践とした。そのため、第一段階で「音」を収集・共有する際に、その「音」にまつわる写真をいっしょに交換し、ストーリー制作ではその写真の中から、自分のものではない他者の写真をかならず 1 枚使用することを条件とした。学生の作品はそれぞれ 3 分程度で、「なつかしい」という感覚を四季の思い出とともに表現したものや、幼少期に家族の転勤ですごしたさまざまな地域のなつかしい風景を表現したものなどがみられた。それらは地域の特性を表現することを強く意識したものではなかったが、季節の行事や景観など、参加者が過ごした地域の文化が自ずと感じられるものであった。



写真 1 合同発表会の様子 (2016 年)

3.3 「街と自然」をめぐる物語 (2017 年実践)

2017 年の「街と自然」をテーマとした実践では、街と自然の結びつきを感じさせる、あるいは考えさせられる「音」が、少なからず収集された。たとえば、街の中できこえる風の音や、噴水などである。そして、「音」を共有する場で特に議論になったのは、どこまでが「街」なのか、「自然」とは何なのかがわからなくなった、といった根本的な問いであった。前年の「なつかしさ」と同様、「街」や「自然」に対してあらかじめもっていた概念が、「音」を収集する経験を通して揺り動

かされたようであった。そして最終的に、ストーリーテリングのテーマとして多くの学生が選んだのは、自分たちにとっての「街」や、地域を再発見する物語だったことは興味深かった。たとえば、熊本出身のある学生の作品は、「街」の音を通して慣れ親しんだ地域を思い起こし、再発見する物語であった。熊本にいた頃、「街」といえば、熊本の中心市街地、熊本城周辺を表したという。たとえば、友達と「どこに行く?」「街」にしよう」というような会話が交わされていたようだ。何度となく訪れたその「街」を離れ、そしてさまざまな街に出会った今、行き尽くしたはずの「街」へ改めて感じる想いが作品に綴られていた。そのほかの学生の作品も、住んでいる場所から大学への道のりと移り変わる景色を表現したもの、子どものころに遊んだ公園、おばあちゃんといっしょに出かけたお祭り、海岸の清掃の思い出、街の開発など、そこで過ごしたからこそ知っている地域の物語が語られていた。

4. おわりに

いずれのワークショップにおいても、綴られた地域の物語は、個人の記憶や経験に基づく小さな物語かもしれない。しかし、こうした「会話的な物語」(“conversational storytelling”, cf. Lambert:2013) だからこそ伝えられる、地域の文化があるように思う。特に、今回の実践は、物語る相手があらかじめわかっていたことや、ストーリーを制作する前の第一段階で、「音」を収集しみんなで共有するという経験があったことが、ひとつのポイントだったように感じている。たとえば、「音にかこまれて生活しているということに改めて感じました。」「音を聞いただけでみんなが共感しあえるってすごいことだなと思いました」といった学生のコメントからは、「音」の収集・共有を通して地域の「音の風景」を描き直した痕跡がうかがえる。また、物語る相手の多くはお互いに会ったことはないけれど、同じ経験を共有し、互いの音

に共感をしていたこと。そうした小さなオーディエンスの中だからこそ安心して語ることができた物語があったのではないだろうか。地域におけるつながりの希薄化が指摘される中で、自らの何気ない日常の物語を、こうした会話のように語る機会というのはますます限られている。そうした日常の何気ない対話の中からこそ生まれる小さな地域の物語があることと、それらを共有する意味について、改めて考えさせられる実践であった。

参 考 文 献

- Davis, Fred. (1979=1990) *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*, The Free Press. (間場寿一・萩野美穂・細辻恵子訳『ノスタルジアの社会学』世界思想社)
- 林田真心子(2017)なつかしい「音の風景」実践 生活史を語る音と記憶をめぐるメディア・リテラシー『福岡女学院大学紀要人文学部編』第27号, pp. 163-182
- Lambert, J. (2013) *Digital Storytelling: Capturing Lives, Creating Communities* (4th ed.), New York, Routledge
- Schafer, R. Murray. (1977 = 1986) *The Tuning of the World*, Knopf. (鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕訳『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』平凡社)
- Schafer, R. Murray. (1992=2009) *A Sound Education*, Arcana Editions. (鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳『サウンド・エデュケーション』(新版) 春秋社)
- 鳥越けい子 (1997) 『サウンドスケープ その思想と実践』鹿島出版会
- Truax, Barry. (ed.) (1978) *A Handbook for Acoustic Ecology*, Vancouver: A. R. C. Publications
- 山岸美穂 (1999) 第1部 感性・想像力とサウンドスケープ, 山岸美穂・山岸健『音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌』日本放送協会出版, pp. 1-160